



# 宮坂 静生薦 岳 4 月

大マスク冬虫夏草愛用す  
手応へは筋肉質の雪と思ふ  
凍滝や雁字搦めの無音界  
野水仙月光暫し停まりぬ  
寒晴の氣受くる形林檎の木  
一言に凍ててをとこの浮気性  
点滴の色なき空や雪催  
打ち上がるぶりこ色々男鹿浦廻  
三が日得体の知れぬ檻のごと  
冬の月棄牛となりし被曝牛  
吠ゆるごと父のくさめや家傾ぐ  
天狼や何の贊とて人は逝く  
\*  
釈迦如来倚像拝みて新蕎麦へ  
春コート誰のものでもなき背中  
スープームーン秘密基地ある月の裏

薄水を掌に少年の日に還る  
笹起きにけり皮蛋の黒びかり  
ペチカの壁にレニン眼窩の図  
手の届く辺りから降る春の雪  
薄闇に貝の吐き出す二月かな  
神馬とて獸の匂ひ花の内  
奥能登の塩ひとつまみ初嗽  
水柱巡らせ鳥籠のごとき家  
遠祖の咸豊年忌ねはん西風  
鳥追祭火打石打つ少女ゐて  
冬霧や泡立ち上がるぶくぶく茶  
身に宿るはつかな磁氣や野水仙  
春の遮断機すくと麒麟の首擡ぐ  
光背の裏側質素小正月

小伊藤美保子 満田光生 古屋洸  
荻原昭廣 榎木幸子 瀬戸柚月 関千賀子 今野晶子 遠藤君子 石橋博雄 荻上美伎子 成瀬嘉一  
飯島千花梨 三品吏紀 飯島千花梨

小林貴子 古畑恒雄 五味真穂 百瀬石涛子 宮地良彦 唐澤南海子 川村五子 寺島芙美子 一志貴美子 渡嘉敷皓駄 田中純子 池間キヨ子 小林富久江 丸山公子 小口洋子

# 岳・見えたるひかり 四月

(476)

宮坂 静生

—同人集・岳集・青雲集から

はじめに。こんなことをいって人はわかつてくれるかしらと思う。しかし、人は自分以上に、自分の内面をわかる経験をたくわえているものだ。そこに人間のすごさがある。

## 早春の地貌季語「笹起きる」—ささやかな確かさ

笹起きにけり皮蛋の黒びかり 五味 真穂

雪国の早春の新季語「笹起きる」に巧みな例句を得た。「皮蛋」は中国料理で、アヒルの卵又は鶏卵を灰・塩・ソーダなどに漬けたもの(『新潮現代国語辞典』)とある。雪を跳ねのける元気な笹の青さと、食卓の中華料理に出された皮蛋の黒との対比。暮しの中から十分に一片の詩情を掬い上げている。句集上木へむけて、意欲を昂めている作者。いい時である。

黄梅やここ鎌倉の二階堂 小林 貴子

春早い黄梅の頃、鎌倉の二階堂谷戸を訪ねたものか。鎌倉宮(大塔宮)から左手には寛園寺、右手には永福寺趾から瑞泉寺へ。まだ人混みができるほどではない。鎌倉の素顔に触れた思いか。瑞泉寺(二階堂道蘿の開基、開山は夢窓疎石)は水仙の寺でもある。地名の二階堂がやぐらの多い鎌倉

の地形を暗示しているようで、歩きながら堪能していよう。  
薄氷を掌に少年の日に還る 古畑 恒雄  
繊細さがいい。純一な好奇心に富んだ少年の日がふと浮かぶ。人生はすべてが一回きりの体験。それも実にあわただしく過ぎる。その渦中にいるときは全体像が掴めない。過去はつねに回想の形をとらざるを得ない。そこにしぜんな哀しみやいとしさが搖曳しよう。

ペーチカの壁にレーニン眼窩の図 百瀬石涛子

レーニンの眼は鋭い。ンベリア抑留中の作か。「眼窓の図」との凝縮された表現に、レーニンの一統を見下ろし統率せんとする迫力を感じる。生涯忘れることができない作者の体験の一コマか。古本屋でレーニン全集など紙屑同然の安値のいま、なにがレーニンの魅力だったのか知りたい気がする。

薄闇に貝の吐き出す二月かな 唐澤南海子

貝が吐き出したものが薄闇と早合点した。「薄闇を貝の吐き出す二月かな」。ところが「薄闇に」であり、あたかも二月という月を吐き出す形の表現になるほどと合点した。勿論に耐えているのである。いささか大きな鳥籠であるが。

遠祖の咸豊年忌ねはん西風 渡嘉敷皓駄

琉球王朝時代の公用暦は「咸豊」など清王朝の年号とか。さすがに沖縄の歴史には想像を超えた苦渋の選択がある。

鳥追祭火打石打つ少女ゐて 田中 純子

佐久市浅科上原地区の鳥追祭は一月三日。獅子舞に白い御幣のはなやきが米どころらしい豊かさを感じさせる。群馬県吾妻郡中之条では小正月。火はみそぎの所作。火打石を打つ少女が巫女めいて惹かれる。

冬霧や泡立ち上がるぶくぶく茶 池間キヨ子

「ぶくぶく茶」が沖縄の伝統的なお茶。沖縄の冬霧に注目。

身に宿るはつかな磁氣や野水仙 小林富久江

磁氣と野水仙との照應、体感の捉え方が鋭い。  
光背の裏側質素小正月 丸山 公子

小正月に仏像の光背の裏を巡る行事でもあつたものか。ちらつと見て、かねての思いを一句に仕立てたのでもよい。平凡なことでも〈気づく〉ことは貴重。一抹の詩情が大切。凡な思いをと願うのがごく自然のところ。「手の届く」にはそんな思いもうかがわれる。

春の遮断機すぐと麒麟の首擡ぐ 小口 洋子

## 拓くことば ⑤ 自句寸言「山の牧」

萍の実をつけいそぐ山の牧 平成九年

「俳句研究」(平成九年十二月号)「岳」も同じ。北信山田牧場詠。顧みると、半生でもこの時の十一句が思いが深い。九月二十二、三日である。ことばの張り、剣気のようなものをだいじにしたいと考えていた。翌年に上梓した句集『山の牧』のあとがきに掲句に触れ書いている。「山の秋はいちだんと早い。沼の萍は短い日照時間の中で、実をつけいそぐ。山の萍を思うと、山国で生れ、そこで暮し、やがて、生を了えるであろうわがことのごとくおもわれてくる。」『山の牧』所収。

コスモスは水平の花かなしみも 平成九年

「俳句研究」(同前)。「秋風やかくも花車なる牛の脚」「秋の鶴長々と脚伸ばしけり」「草市の荷に一掬は湖のもの」なども同時詠。牧の斜面にコスモス畑があつた。花は水平な顔を空に向けて清楚。透明な知性もある。この平常心に打たれた。世に旗を振ることもなく、隠遁もせず、素心を磨き生きる。生きるかなしみ。コスモスを見つめるたびに洗心の思い。『山の牧』所収。

月夜茸笑茸にも誘はれ 平成九年

「俳句研究」(同前)。「悼上田五千石さん」と前書。こ

上がる遮断機を麒麟の擡げる長い首と見たのが春らしい。雪嶺集・前山集推薦候補作を掲げる。

見えぬ目にはつかな光や笛子鳴く  
少年は雪降る音の聞こゆとふ  
海鼠腸や眞実どこか惨らし  
一里一尺煉獄のしづけさに 滝澤あや

國見敏子  
宮坂やよい  
志摩晴樹

筋肉質の雪とは根雪か

手応へは筋肉質の雪と思ふ 小伊藤美保子

雪に筋肉質とは。根雪になるよう重い、しつこい雪か。搔く手応えなので、どんないい方でもよいが、雪には途方もない形容。しかし、どこか男の体にでも触れる肉感がある。

凍滙や雁字搦めの無音界 古屋 洪

聴覚(音)の世界を視覚(目)で巧みに抑え込みに成功した。考えに考え、がつちり一幅の日本画に仕立てた感じ。

野水仙月光暫し停まりぬ 萩原 昭廣

野水仙に月光。それだけであるが、「暫し」が巧み。意欲的。

寒晴の気受くる形林檎の木 杠木 幸子

まさに男女の仲のかけ引き。恋人同士。夫婦ともなると、あけすけに「浮気性」などとは言い放てない。うらみつらみを言い、浮気性の相手への未練がある。頼まれもしない人生相談めく。

一言に凍ててをとこの浮気性 瀬戸 柚月  
原句「寒晴や氣受くる形に林檎の木」。比較してどうであろうか。「寒晴の気」の具体例が林檎の木の形とみた方がわかり易い。矮小化で奇怪な形をしている林檎の木である。

打ち上がるぶりこ色色男鹿浦廻 今野 晶子

まさに点滴や色なき空の雪催」とするとわかり易いが、点滴液の透明なチューブ(あるいは袋)を通してみた空と私は解した。千賀子さんの病状を心配している。句集上々。どうか一日の平安を。

萍の背臘脂に枯れて平泉 平成九年

「岳」(平成十年一月号)所載。十一月九日、第四十三回松島芭蕉祭に加藤三七子と招かれ、講演。前日、鈴木八洲彦氏の案内で多賀城、壺の碑、塙竈神社、雄島など見る。佐藤鬼房も元気。「瑞巖寺窟」ひとつひとつ冬。翌日、「岳」衆と達谷窟、中尊寺などバスで廻る。鮮やかな蝗を見た。金色堂のミイラのイメージ。『山の牧』所収。

人參も青年も身を洗ひ立て 平成十年  
「岳」(平成十年一月号)所載。どこかにアメフトやサッカー好きな二人の子のイメージがあつたか。好まれて色紙に書く。「洗ひ立て」表現が流行る。『山の牧』所収。

「ぶりこ」とははたはたの卵。男鹿の漁村に、海草に付着したぶりこがどつと打ち寄せられ、はたはた漁のはじまり。真冬の男鹿絶景。

さんが日得体の知れぬ檻のごと 遠藤 君子  
正月三が日、「得体の知れぬ」檻に入れられたようだとは見事ない方。自己省察が鋭い。

冬の月棄牛となりし被曝牛 石橋 博雄

冬の月下、辛い指摘通り。この現実を忘れないための句。

吠ゆるごと父のくさめや家傾ぐ  
天狼や何の贊とて人は逝く 荻上美伎子

えさせられる。神の「贊」であろうか。

前句の「家傾ぐ」の滑稽はお見事。後句の「贊」は深く考

えさせられる。神の「贊」であろうか。

岳集推薦候補作を掲げる。

狼を思へば身ぬちに雪降れり 奥山 源丘 成瀬 嘉一

高橋 龍治

柿谷 有史

西村 美枝

正村 和子

鱈祭桜もて跳ぬる子の神楽

バレンタイン造語だらけの街に住み

曳き終わる藁馬屋根に放りけり

水仙の葉に付く粉を落とすまじ

青雲集—新鋭つきつき

鞆迦如来倚像拝みて新蕎麦へ 土屋 隆

「倚像」とは台座に掛け両足を前に垂らしている仏像。そんな釈迦如来の坐像を拝し、新蕎麦を食べに行った。真実をいっただけのおもしろさ。なんの説明も加えないことで生まれる意外な感じ。上句の重厚、下句の日常卑近。見事と思う。

春コート誰のものでもなき背中 三品 吏紀

春コートを着て、前を行く人混みの他人の背中。「誰のものでもなき背中」とはびっくり。まさに現代。三十代の新鋭。

スーパームーン秘密基地ある月の裏 飯島千花梨

中国の月探査機が月の裏側に着陸成功とのニュースが入った。満月より大きく見えるスーパームーンのときの幻想が実景かと思わせるところがふしき。

青雲集への投句が増加している。新鋭の競う場にしたい。

大マスク冬虫夏草愛用す 満田 光生

「冬虫夏草」とは冬は虫、夏はきのこ（夏草）の形をとる強壯の秘薬、あるいは咳止め生薬。チベットでオオコウモリガの幼虫に寄生して生じるきのことか。どこかうそっぽい薬。この薬を愛用するとはますますうそっぽい。こんな漢方薬で効き目があるものか。大まじめにこんな句を作る御仁は光生さんくらい。よくさがし出し、人を誘い込む。蕪村研究家の作者らしい着想に感心した。

## 今月の秀句